

## 現代中国の道教と道士 —杭州道教協会の聞き取りから—

二宮一郎

### I はじめに

2007年夏、中国浙江省杭州を訪れ、杭州市道教協会の三人の道士から聞き取りを行った。その聞き取りと文献資料から、現代中国の宗教政策と道教協会の組織実態および協会傘下の道士の生活環境について、概略をうかがうことができた。本報告は、今回の聞き取りをもとに、現代中国とくに江南地域における道教と道士について、その実態の一端を明らかにすることを趣旨とする。

中華人民共和国建国後の道教界は、苦難の連続であった。特に文化大革命下の十年間は、道教に限らず宗教界に未曾有の<sup>かんなんしんく</sup>艱難辛苦をもたらした。しかし、その後は改革開放政策の下に、宗教環境は確実に好転しつつある。道教界もそれを受けて柔軟に対応してきた。

道教関係者は、国家の宗教政策を支持することによって、研究活動や関連文化財の保護・人材育成を通じた道教の継続発展などを図っている。しかしながら、現代中国社会全般の急激な変貌の中で、中国伝統宗教の主役を担う道教界が、いかに順応し成長発展しえるのか。この課題は、政治経済の基本問題に限らず、広義の精神世界を含めた「現代中国」の将来を占う一つの重要なキーポイントと考える。

### II 中国江南の道教

#### 1) 道教と道士

最初に、道教と道士について概説することにする。道教は中国固有の宗教で、原始的なアニミズムにもとづく雑多な民間信仰、老荘の思想、不老不死の神仙思想、シャーマニズム、陰陽五行思想、易学などのさまざまな信仰、思想、哲学が混じりあい、儒教、仏教と常に対抗しながら、同時にそれらの要素を取り入れて成立した。

道教が教団としての形を整え、その経典が生み出されたのは、中国の魏晋南北朝と呼ばれる時代である。後漢末から三国の時代、太平道は『太平経』と呼ばれる経典に基づき、

## 〈杭州西湖周辺道観位置図〉

西湖の北に葛嶺山抱朴道院、南に玉皇山福星観。(引用：竹内実『中国長江歴史の旅』朝日選書 2003年)



「西湖十景」とその周辺

(羅亜蒙ほか『中国歴史文化名城大辞典(上)』  
人民日報出版社 1998年より)

乱世を去って、太平の世を実現することを理想としていた。そして護符を焼いて入れた水を飲み、神々に犯した罪の懺悔をすることで病気を治す、という方法などによってしだいに信者を獲得していった。この教団や、五斗米道という宗教結社も同じような教義を持ち、さらに教団組織を整えて祭酒と呼ばれる指導者が教徒を統率していたが、これらの教団が道教の起源となった。特に、五斗米道の開祖とされる張陵の子孫は、のちに張天師と呼ばれるようになり、現在でもその系譜を伝えている。そして、魏晋南北朝から隋唐時代にかけて、中国を代表する宗教として儒教・仏教とならぶ地位を獲得していったのである(松本浩一『中国人の宗教・道教とは何か』)。

こうした道教教団に所属し、仙人になることを目指して山に庵を構え、あるいは道観という施設に寝泊まりして日々修行に励む人が道士と呼ばれる人たちである。現在、道士は大きく分けて全真教と正一派の二つに分かれる。前者は出家主義を取っており、原則として妻帯せずに道観という施設にあつて修行に励む。後者に属する道士は家庭を営み、主として人々に呪術儀礼を施すことで生活を立てている(松本浩一、同上)。

道教の経典は、「道蔵」と呼ばれる一大叢書の中に集められているが、「道蔵」に収められた書物ばかりでなく、中国各地の道士に伝えられた儀礼書や、地方的な伝統を伝える経典は数多く存在している。それらのうちいくつかは出版されているが、ほんの一部にすぎない。中国では一時は消えかかっていた道教の伝統も、現在では中国文化の遺産の一つとして見直され、各地の道観で若い道士の養成も行われるようになってきている。

道観とは仏教の寺院にあたる建築物で、道士たちはそこで修行を行い、神々を祭り、宗教儀式を行い、日常生活を送る。その点で同じ〇〇宮という名前がついていても、地域の人々の寄付によって建てられ、その人々の信仰の中心となっている祠廟とは性格が異なり、こちらは日本でいえば町や村の神社にあたる。

戒(教徒が守るべき規約で、条文によって表現される)や経・籙(るく)の伝授は、道教教団の階梯制度と密接に結びついていた。籙は道士の位階によって授けられる免許状のようなものである。正一派では、道教の信者になると護神符と三戒を受ける。続いて五戒・八戒を受け、そのあとに籙を受ける規定になっていた。

明清時代になると、全真教の教団では、戒の伝授は道士が資格を得るための重要な儀式

となった。一方で、正一派については符籙の伝授が重んぜられた。このことは、正一派の道士が、呪術儀礼を施すことを主な役割としていたことと密接に結びついている（松本浩一）。現代中国では、主な流派は全真教と正一教の2流派のみであり、小分派は83派ほどとなっている（窪徳忠『道教の神々』）。

現在の中国では、全真教と正一教の両者を代表する機関として「中国道教協会」（1957年成立）が全真教祖庭の一つである北京の白雲観に置かれている。思想や活動内容から言うと全真教は出家主義で禁欲的・自己修養型であるのに対し、正一教は在家主義で呪術救済型の傾向をもつ。しかし、全真教は戒律が厳しくて現代一般の生活状況からかけ離れているので若手の後継者の確保が難しく、たとえ専従の全真道士となっても俗界から断絶して生活しにくく、おのずと純粹厳格な出家道士とは言えないような修道生活になじんでしまうことになる。

一方、正一教も呪術救済型とはいえ救済のためにどのような呪術を行ってもいいというものではなく、術を行使する対象や方法にも制限があり信者の言い分や金銭欲に幻惑させられたような活動はできない。特に国家に対する反動的な活動は、今後の宗団存亡にも関わるので、こちらはこちらで在家道士でありながら全真教の出家道士に近づいた禁欲・節欲的な生活に近づいていく。したがって全真教も正一教も両者の修道生活の内容は互いに近づきつつあるのが現状である（奈良行博「地域社会と道教」）。

## 2) 杭州道教の地位

訪問した浙江省の省都杭州は、行政的には、上城、下城、江干、拱墅、西湖、濱江、蕭山、余杭の8区と富陽、臨安、建徳、桐廬、淳安の5つの県または県級市を管轄しており、総面積は16596平方キロ、そのうち市内面積は、3068平方キロの広さである。2005年末の杭州総人口は651.68万人、市内人口は401.59万人となっている。住民の大部分は漢民族である。

地理上から見ると、杭州は中国東南沿海に位置し、京杭運河の南端に位置する。上海から151km離れ、長江デルタ地帯の南部の中心都市である。杭州の南西部には起伏の多い丘陵地帯が多く、北東部はなだらかな平野が広がる（『杭州観光案内』2006）。

浙江大学教授の孔令宏氏によれば、杭州道教は浙江道教の中核をなし、その始原は遠く春秋時期に遡るといふ。さらに、春秋より戦国を経て漢代に至るまで、道家思想は浙江地区において、連綿と受け継がれて絶えることはなかった（孔令宏「浙江道教史発凡」）。

三国時代になって、著名な道士葛玄かつげん（164～244）は、かつて浙江の多くの地方に伝道し、宗教活動に従事した。『抱朴子』を著した葛洪ほうぼうしは葛玄かつげんのかつこうの孫子で、かつて浙江に到り、杭州葛嶺抱朴道院で仙薬を調合したという言い伝えがある。

明末から清中期にかけて、浙江地域は全真教龍門派が重点地区としていた。ただし、清代中期以降、全国的に道教の政治的地位は下降し、浙江の道教もまた衰退した。しかしな

がら、現代において浙江の道教は苦難の道ながら、大いに努力健闘している現状がある。

こうした経緯により、浙江には多くの歴史的遺構が残存している。杭州玉皇山は清代以来の多くの道教遺跡を有しており、八卦田<sup>はっけ</sup>や玉皇宮・紫雲洞・七星亭・福星觀<sup>はくぎょくせんせい</sup>・白玉蟾井などがあげられる。既述の葛嶺抱朴道院と黄龍洞及び玉皇山福星觀を合わせて「西湖三大道院」と称せられる。

今日、浙江道教の宮觀数と信者の人数は、中国大陸各省の中で最も多い。全真・正一兩派合わせた道士数も、中国大陸全体の五分の一を占める。同様に全国道教界にあって、浙江は重要な地位を占めている。「文革」などにより、浙江道教界は一時的な低迷・沈滞を経験した。しかし現在は、新時代の到来により自己調整に努め、未来に向かって堅実なあゆみを開始しているという（孔令宏）。

### Ⅲ 杭州道教・道士聞き取り

#### 1) 今回の聞き取り調査

杭州市道教協会所属道士に対する聞き取りは、浙江大学人文学院教授呂洪年氏、浙江大学道教文化研究センター主任教授の孔令宏氏、同大学非物質文化遺産研究センター主任教授の頼金良氏等、複数の浙江大学関係者の尽力によって可能となった。猛暑の中、二日間に及んだ聞き取りの応答内容を、以下に紹介する。なお、応答者氏名は道教協会長のみ公開し、他の二名は匿名とした。質問は林耕二氏（大阪府立和泉総合高校）と二宮が行い、通訳を呂順長氏（四天王寺国際仏教大学）にお願いした。

#### A. 応答者：〇〇〇（34歳）

日時：2007.8.15 9:30~11:15 場所：杭州玉皇山福星觀の一室

質問者：二宮一郎，林耕二 通訳：呂順長

★（筆者注—玉皇山の案内板によれば、〈標高237メートル、山頂に達すると「玉皇山」と額のかかった南大門と「祥雲護仙」の壁画が迎える。主要な建築になる福星觀は唐代に建てられ、もと仏教寺院だったが、後に道教寺院に建て替えられ、現在は料理店になっている。道觀の周辺には宋代の遺跡「白玉蟾井」と清代の「天一池」がある。新たに「望湖楼」「登雲閣」等の建物が建てられた。遠く左に西湖、右に銭塘江、眼下に杭州城を望むことができる…〉と記されている。江南五省（江蘇、浙江、安徽、江西、福建）全真派の第一座とされ、香火旺盛で高名は遠く響いている。なお来年秋に福星觀が再建され、落成式典を挙げる予定である。）

#### 道士になったきっかけ

・身体が弱く、現代社会のストレスがあった。気功と太極拳を習い、身体が良くなったので、道教に興味を持ちだした。道教の原理を追及して、26歳の時（1999年）、出家道士と

なった。

- 上海出身で、パソコン会社を経営していた。

### 家族は反対しなかったか？

- 個人の自由である。

### 道士としての生活

- 道観での生活は、素朴な生活である。
- 出家してから、考え方や世の中の見方が変わった。
- 道士になってから、4年制の浙江中医学院に入学、卒業して医師の資格を持っている。  
☆（呂順長注—一般入試による入学は難関、特別枠があるのかも？）
- 陰陽五行説に基づいて治療している。
- 荘子の言葉に「通天一気耳」とあるように、あらゆるものは気からなっている。  
★（筆者注—『荘子』「知北遊篇」にその死生観について、〈天下を通じて一気のみ〉とあり、生死は一気の離合集散であって、もともと一なるものであると論じられている。）
- 道士としては、この道観の再建に努め、個人の修行を行い、社会活動や音楽・書画に関心をもっている。

### 道教教派について

- この道観は全真教龍門派に属する。全真教は出家主義で道観に住み、社会活動にかかわっており、日常に「齋戒」（<sup>さいがい</sup>穢れを去る行事）をしなければならない。在家主義の正一派は自宅に住み、特別の時以外「齋戒」にかかわらない。  
★（筆者注—龍門派は、全真教の開祖王重陽（1112～1170）の七真と称された七人の弟子の一人、丘長春（1148～1227）によってたてられた一派で、現在最大勢力を占める。）

### 両者の教義の違いは？

- 答えなし。
- 基本的には、<sup>たいじょうろうくん</sup>太上老君の教えからきている。  
★（筆者注—太上老君は老子が神格化したものである。）

### 道士の仕事

- 「邪気」を払うことにより、気を正しく調整する（正気）。
- 病気の治療をすること。
- 風水を見るのが一つ、法事をするのも一つ。

### 葬礼について

- 葬儀は年3回忙しい。この時期はよく亡霊がでる。季節の変わり目のため亡くなる人が多い。

①清明節

②盂蘭盆 <sup>うらぼん</sup> 旧暦の7月15日。最近復活している。

☆（呂注—浙江では盆の時に道端に蠟燭を立てたりして、先祖を迎える。各家で御馳

走を作って、紙銭を燃やす。)

### ③冬至

☆(呂注一冬至の時も線香を焚いて先祖を迎える。家で御馳走を作って、その日のうちに先祖を送り出す。杭州郊外の農村の習俗。)

★(筆者注一墓参については、①民間での冬至拝賀も朝廷と同様盛んであった。〈最も是れ冬至と歳節とは、士庶の重んずる所にして、餽送節儀、及び举杯相慶、祭享宗禋の如きは、常節に加う〉(『夢梁録』)。また『清嘉録』拜冬に〈至日を冬至と為す。朝士大夫の家、尊長に拝賀し、又た交こもこも相い出あつあつす。細民の男女も亦た必ず鮮衣に更え、以て相い揖ゆうす。之を拜冬という〉→中村喬『中国の年中行事』。②さらに十月朔は鬼節にあたり、墓前だけではなく道観寺廟に詣でて先祖を祭祀する。毎年この日になると、道観には連日人々がつめかけ、亡くなった人の魂を超度し生きている人の平安を祈る。上海白雲観のある道長によれば、十月朔前後が最も忙しく、清明節や中秋節に比べて道観を訪れる者が多いという。→史孝進・劉仲宇主編『道教風俗談』)

・葬式では、怨えん気きが残っているのをなくす。つまり、生きている間の不満や苦しみなどを取り除き、正しい気である世にいけるようにする。

・流派によりいろんなやり方がある。今は土葬がなくなり、あまりやらない。

・謝礼は決まりがある。道観の出費等があり、有料である。

・無料になるのは

①生前、よく協力してくれた、徳の高い人。

②自然災害で亡くなった場合、公益事業として行う。

③無縁の方

### 正しい気を作るための作法＝「超度」

・死んだ人の悪い気を直すのを「超度」という。

・道教のお経を唱える。レベルに応じて、独りでやるのもあれば、たくさんの道士でやる場合もある。

### 鬼払い「送鬼」

・鬼界とか太相界とかいう。人間界とは異なる。

・怨鬼をはらうこと。

・自然災害や戦争などで亡くなるのを「枉死おうし」という。怨鬼ではない。被害者である。

★(筆者注一青浦県徐涇郷では、治病儀礼を行うことは弄鬼ろうきと呼ばれていた。弄鬼は、大きく2つの部分に分かれており、それぞれ問鬼、送鬼と呼ばれた。問鬼は実際の治病儀礼に先立って、病を引き起こす鬼の正体をつきとめ、どのような儀礼を行うかを定めることである。そして、送鬼が実質的な治病儀礼となる。通常、送鬼では、供物を用意し、道士や太保たいほなどを呼び儀礼を行うことになるので、儀礼の規模に応じてそれなりに多額の出費を伴っていた。これに対して、特に問鬼を行わず、自分自身の診断で簡単な

供物をそなえるだけの場合もあった。これは、弄鬼に対して、小弄鬼と呼ばれていた。  
→東美晴『解放前中国江南農村におけるジェンダーの研究』

### 過去帳「鬼冊」

・昔は地域を決めて、亡くなった人を道士に報告した。「陰陽門巻」といった。ここにはない。このあたりには、扱っている人はいない。

★（筆者注—鬼冊とは、ある種の過去帳であり、その廟界内の死者が家ごとに記録されたものである。東美晴氏によれば、青浦県徐涇郷において、鬼冊の管理は通常道士か僧侶が行っていた。鬼冊を所持し管理することは、これを行う道士や僧侶に相当の収入をもたらした。鬼冊を所持する道士や僧侶の仕事は、廟界の人々の死亡記録を管理することであった。具体的には、鬼冊に新たな死者を記入していくことと、鬼冊の記録をもとに経疏を書き、それを節季毎に各戸に配布することであった。）

### 信者に対する活動

・多人数に対する説教などはしない。個人個人に教えることはある。

☆（孔令宏・浙江大学道教文化研究センター主任の説明—香港、台湾では多人数を対象にした説教をする場合があるが、ここではない。）

### 道士の位階

・上から、方丈—住持—総理—都監—八大執事。

・いま、この道院は再建中で、道士二十数人いるが、まだちゃんとしていないので、自分のランクははっきりしていない。

★（筆者注—遠慮して口外しないのか？不明。）

### 太保・巫師

・今もいる。しかし、正式には認められていない。けっこうやっている。年配の人。

★（筆者注—太保<sup>たいほ</sup>の由来は、殷代の官職「太卜<sup>たいぼく</sup>」が訛ったという説（顧希佳・張玉観「太保書調査」）と『水滸伝』中の登場人物である神行太保・戴宗から取られたという説がある。『水滸伝』中のこの人物は足が速いことで有名であり、太保の速い足で追いかけられたら、鬼も即座に遠のくであろうと、この名がつけられたという（東美晴）。太保は説書（語り物の類）の節回しに乗せて、鬼を追い出すことを内容とした語りである「太保書」を行う人である。太保の語は、宋代では怪しげな祈祷をする妖人を意味した。南宋の末頃に出た名奉行といわれる孫子秀が、蘇州呉県の内務部長であった時に水仙太保と称する妖人を退治している（『宋史』「孫子秀傳」、宮崎市定『水滸伝—虚構の中の史実』<sup>ふし</sup>）。巫師はシャーマンの一種で、災厄の原因をお告げし、太保と同様に鬼払い等を行った。女性の場合巫婆あるいは巫娘と称した。）

### お札

・原始道教にはお札があるが、今の道教にはない。非科学的なものは今は薄れている。科学的に検証されたものを追及する。

## 家族のこと

- ・23歳の時に結婚、いま6歳の子供がいる。  
★(筆者注一応答の最初は、道士になってから結婚したような口ぶりがみられた。微妙。)
- ・全真派では結婚は昔は許されていなかったが、今はいい。ここの20数名の道士の中で結婚している者は他にもいるが、全体としては少ない。  
★(筆者注一協会会長の話では、出家道士の結婚は許されないことになっている。)

## 子供の教育の苦労は

- ・道観の仕事で手いっぱいなので、家庭の事はほとんど何もできない。妻にまかせている。
- ・家は杭州市内で、出家しているので家に帰るのは少ない。

## 道教文化について

- ・中国の優れた文化だから、もっと世界に広がるだろう。  
★(筆者注一抽象的な応答に終始した。)

## 陰陽道について

- ・『こうていだいけい黄帝内経』の中にある。5000年以上も歴史ある文化である。「どうせいあいおうじ同声相応、どうきあいもとむ同気相求」(『易経』上経 乾為天)である。  
★(筆者注一陰陽道と道教の関連性について強調している。『黄帝内経』は前漢の中期以後に成立。そこに書かれた生理学では、陰陽の二気と五行の要素が脈によって身体をめぐり、生気を保つとある。→村上嘉実「鍊金術」))
- ・陰陽道には親しみを感じる。

## B-1. 応答者：高信一（73歳） 杭州抱朴道院住持・浙江省道教協会代表長

日時：2007.8.15 14:45~16:50 場所：杭州抱朴道院事務室

質問者：二宮一郎、林耕二 通訳：呂順長

★(筆者注一標高166メートルの葛嶺山中に抱朴道院はある。抱朴道院はもと抱朴廬、葛仙庵と称し、著名な道学者・化学者・薬学者葛洪祖師の道教廟観であった。抱朴廬は晋代に創建され、唐代に増築。五代から宋に至り、南宋時代には宰相賈似道かじどうの別荘となった。元代に兵火によって一部が焼失したが、明初に再建され、葛仙庵と名を変え、正統年間より漸次廃棄の憂き目を見た。明の万暦年間に、地方官が呼びかけて士紳及び葛氏末裔から抛金して再建できた。その後は、長年の風雨に耐え今日に至っている→『抱朴道院紹介』。また主神は葛洪であり、ろどうひん呂洞賓や東岳大帝が併置されている。呂洞賓を祭祀することから、この道観は清代以降は全真教龍門派の十方叢林として扱われている。その前門には王靈官(重陽)の像が掲げられている。→二階堂善弘「杭州の寺廟について」)

最初に抗日時期より文化革命まで、本人の苦労話が30分近く続く。

- ・杭州が日本軍に占領され、多くの女性たちが日本軍に暴行された。若いきれいな女性は、

顔に泥を塗って被害を避けた。

・日本軍から逃れて、七千人の市民は福星観に逃げ込んだ。道観の住持が、日本の憲兵隊司令部へ行き乱暴なことをしないよう訴えたので、4人の憲兵が日本軍を説得して止めさせた。憲兵隊の効果は<sup>てきめん</sup>観面で、避難民に対する兵隊たちの暴行はいつぱんに収まった。この立派な住持は、文化大革命の時に日本の憲兵隊と関係があったということで、大変な迫害を受けた。

★（筆者注—1937年12月24日に杭州陥落。1945年8月15日、日本の敗戦まで杭州占領が続いた。→本稿VI「杭州日中戦争秘話」）

・1949年以前、道士は200名ぐらいいた。

・新中国になり毛沢東の宗教政策によって、道士のお祖父さんは牢屋へ入れられ、自分も三か月ほど牢屋に入った。51年頃までのこと。

☆（呂注—中国では宗教は迷信とされ、「精神阿片」といわれた。）

・56年頃、道士はいなくなった。

★（筆者注—57年6月反右派闘争開始。〈57～66年までの十年間、国家建設は<sup>うよきよくせつ</sup>紆余曲折の道をたどり、道教界も全国各界人民の命運と同じく、苦難の道を歩むことになった。しかし、後に続く「文化大革命」時期67年から77年までに道教を含む宗教界が被った激烈な衝撃の十年に比べれば、その性格と打撃面で明らかに区別される〉→李養正主編『当代道教』。）

・文化革命期は、この福星観は杭州市園林局の管理下にあった。3年前に道教協会に返してもらった。しかし入場料10元は全額、園林局の収入になる。今建物を再建中で、来年秋には竣工する。その時は、落成式典と葛洪シンポジウムをやりたい。

☆（呂注—園林局は寺院や公園を管轄する。80年代から宗教局がある。文革期からか？）

### 杭州市道教協会

・1929年結成。全国的に早い方である。中華道教協会は、その前に出来ていた。

・全国と地方の協会は、上下関係にはない。

・ここの道教協会について記した書籍は特にない。

・1985年に、日本の東京大学東洋史研究室の蜂屋邦夫氏（筆者注—現大東文化大学教授。杭州市道教協会についてふれた著作はない）が来た。日本の科研費を使つての調査研究であった。

・解放前は道教学会といった。信者を中心とした組織である。学会内の争いがよくあった。小グループでの争いがあった。流派によって服装が異なる。

・1949年以降道教協会に改称された。信者でない者も入会できるようになった。

★（筆者注—1944年中華道教総会が上海白雲観にて成立。→『当代道教』20世紀道教大事年表))

・80年代に、道士ブームが起こった。「少林寺」と「武当山」という2つの拳法映画が大当たりをとったからである。男女共にたくさん道観に集まってきた。当時基本的には女性は受け入れなかった。しかし湖北省武当山で二人の女性が、山から飛び降りて死んだ。そのため、湖北省政府は女性も道観に受け入れることを認めた。それで、ここもそうした。

・80年代に入った人たちは、偉くなっていい待遇を受けている。

・その頃は、貧乏で道士になる人が多かった。食べ物があるからだ。今は道観に入ることを希望する者は少ない。何故なら、①一人っ子政策、②生活水準がよくなった、③就職口がある、④基本的に聞こえがよくないからである。

☆（呂注—④は中国語で「不很体面」と表現。）

・昔は道教に執着する人々がいた。たとえば、①幼い時に道観に入りそこで育った人、②30～40代で人生に失意した人、③親不孝の子供のため道観に入り死を待つだけの老人。

・今はこうした人々はいない。老人は法律規制により山に入れなくなっており、中年層も失意してもすぐに気が変わってしまう。

### 協会の組織

・杭州市道教協会には、2つの道観が所属し、百数十名の道士が登録されている。

・会費は徴収していない。

・会員による選挙と会議がある。総会。

・杭州市民政局に登録され、国に認められている。

・道士は20～30代が多い。50代は少ない。

・80年代に再スタートしたので、若い人が中心である。それまでの人は少なくなっている。

☆（呂注—道士の数は、実際は数十名と思われる。会議の実態もはっきりせず、会費も徴収していないことから考えて、協会組織がしっかりしていないのでは？）

### 協会の財源

・政府からの助成金は無い。入場料（抱朴道院5元、道観の収益。福星観10元、園林局の収入になる）と線香代（純益平均1元）と寄付金によって運営している。寄付が一番大きい。寄付者は、金のある人・事業に成功した人。5万元寄付した例がある。

・入場料は、昔は取らなかった。文革後の80年代から始まった。入場料をとらないと人が多くて困った。寺院なども入場料が収入の主なものとなった。今は競って値上げしている。ここは十数年前から、5元に据え置いている。

☆（呂注—入場料徴収は市政府の許可がある。会長は、入場料を取らなくてもやっていけると考えているようだ。）

### 北京の白雲観のように功德を宣伝しないのか？ おみくじやお守りは？

・ここではやらない。神（人物）の知識の紹介をしているだけ。

・おみくじ、お守りを売ることはしない。

## 道観の神々

・福星観の北斗七星信仰。子午線の北は北斗七星。南は重視されないが、南斗七星もある。ここの道観には両方ある。北斗は死を、南斗は生を示している。ふつう、人は生のことをあまり考えない。道教の考えでは、死生両方ある。生のことも重要である。

★（筆者注―道観境内に建ちならぶ各祠殿楼閣は、中国の伝統的な建築思想「北坐南面」に則って、おおむね南北を結ぶ線の中軸として、南を入りに北へと連なる場合が多い。道観のなかでも、教団が道士の修養を目的として自立的に活動するところでは、入口から奥へ靈官殿、玉皇殿、三清殿の順で配置されていることが多い。このうち、靈官殿は門と一体になっていることが多く、憤怒の顔相で睨みを利かせ、手には剣を持って、片足上げの跳躍姿勢をとる靈官像が置かれる。靈官は戒律に背く者を糾察する任務を帯びた護法神のことであり、この像があることで、そこからが道教の神聖な領域であることを示す。玉皇殿には庶民が道教の最高神と崇める玉皇大帝が祀られる。三清殿は道教教団が天界の最上部に鎮座する神として尊ぶ元始天尊、靈宝天尊、道德天尊の三天尊を祀る。三清殿は、道観境内では最も尊い場所なので、奥深く且つ高い位置に構えられる。  
→奈良行博「道観・祠廟と神々」

## 廟会の有無

・廟会はやっていない。

## 協会の仕事

・政府の宗教政策を信者に伝えること。また道教教理として、素朴に生活することなどを信者に指導する。

・政府と信者の橋渡しの役割である。

・神様を信じたら、こういういいことがあるといった宣伝はしない。

・道教全体としての宣伝をしている。

## 民間の道士

・杭州市所轄の県を含め数千人いる。彼らは道教協会の会員でない。信者はけっこういる。

## 高信一氏の個人史

・自分より古い人はいない。6歳の時（1939年）、父と一緒に山に逃げ込んだ。その福星観で道士となった。祖父は道士であった。

☆（呂注―父が道士であったかどうか、明言なし。）

・6歳では、信仰を持っていたわけでもなし、生き残った今、恩返しの仕事をしている。

・協会に入って五十数年になる。いろんな役職についた。

## 道士の社会的地位について

・（筆者の考え）道士であることに対して、世間体は良くないらしい。男性道士の家族についての聞き取りで家族について質問すると、立会人の孔令宏氏から「研究に係わりがなげ

れば聞かないで下さい」とクレームを受けた。

・高会長は、道士の地位について「人がどう見るかの問題である」（這是人家如何看的問題）と応答。

☆（呂注—中国人の間では、僧侶や道士はイメージが良くない。僧侶より道士のほうが下である。民間の道士は金もうけでやっているように思われている。今は道士の希望者が少ない。イメージが悪いから。）

## B-2. 電話による聞き取り 応答者：高信一（73歳）

日時：2007.8.16 午後 質問者：呂順長

### 女性道士について

・14名いる。20代から40代。  
・道士になるきっかけは、人生の挫折が多い。家庭生活と恋愛問題。一時的に人生から逃れるため、最初は固い意志だが、落ち着いてくると直ぐに翻意する。ここ十数年で、少なくとも百数十人は入ったが、ほとんど出ていった。入ってきた人の話をすぐに信じてはいけない。すぐ変わるから。

★（筆者注—現在の社会状況を反映していると考えられる。）

## C. 応答者：女性道士〇〇〇（42歳） 杭州抱朴道院副住持 杭州市道教協会副会長

日時：2007.8.17 15:20~16:00 場所：杭州抱朴道院事務室

質問者：二宮一郎，林耕二 通訳：呂順長

### 出家のきっかけ

・母は仏教徒であるが信心深かった。

★（筆者注—直接のきっかけについては答えず。）

・20歳くらいの時、関係者の紹介で、臨海出身者4人がこの道観に来た。1人が案内役で3人が山に入った。2人は途中で郷里に帰り、今も残っているのは自分だけ。

★（筆者注—臨海は杭州より南東方向約180km、現浙江省臨海市。）

・当時85年頃、女性の道士（道姑）が20数人いた。出て行く人も多く、流動的だ。  
・こちらに慣れてしまったから。性格的にも静かな所が好きである。

### 道士としての生活

・朝5時に起きる。「早課」といってお経を唱える。1時間くらい。  
・昼間は事務の仕事。その他与えられた仕事をする。入場券のモギリなど。  
・「法事」の時はみんなでやる。  
・ここには十数名の道姑がいる。アルバイト的な者もいる。  
・入ると、まず音楽を学ぶ。二胡，琴，笛，鉦，太鼓など好きな楽器を選ぶ。  
・80年代には、武術をやっていた。太極拳が中心で、当時年配の師匠がいた。今は師匠も

いないし、やっていない。

### 法事について

- 先方からの頼みで行う。春は毎日忙しい。
- 4月頃、各地から大勢の人が「<sup>れいいんじ</sup>霊隠寺詣り」にやって来る。その際に、抱朴道院の存在を知り訪ね来て、法事を申し込む人がある。
- 規模は小さいので800～1000元。大きいのは1万元以上。お金持ちによる。
- 年3回法事に来る固定の客もいる。
- 杭州以外では上海・江蘇から。福建などは遠いから来ない。
- 法事は女性だけです。太鼓・鉦などいろんな楽器を使う。読経は唱えるのと唄うのがある。

### 特別の作法はあるか？

- 「罡歩（カンブー）」という足の運びがある。八卦思想に繋がっている。  
★（筆者注—罡は北斗七星の意味。<sup>うほ</sup>禹歩・<sup>へんぱい</sup>反閑に同じ。）

### 道士の育成

- 入ってから年配の方が教えてくれた。今は亡くなっていない。自分がここで一番長いので、人に教えている。
- ここは正式な教育をしているので、他の道院からも学びに来る。交流もある。他省からも学びに来る人がある。
- 最初は、音楽に慣れてもらうために、楽器を教える。
- 抱朴道院は女性道士、福星観は男性道士が出家修行している。

### 道士のランク

- 自分は副住持である。知客・寮房・殿主……。  
★（筆者注—上下のランク不明、知客が下位か？）

### 服装によって階級差があるのか？

- あまり関係ない。ちなみに今着ているのは「道服」といい、夏用と冬用はべつである。  
★（筆者注—道衣は道装もしくは漢装といい、長短の二種がある。道装の色は、青藍色・黒色・赤色の三種ある。道巾には九種類ある。→窪徳忠「北京白雲観の現状について」）

## 2) 現代中国江南のフィールド調査

80年代後半以降、日本人研究者によってなされた、民間信仰等に関する江南地域のフィールド調査が四つある。第一は大阪大学（当時）濱島敦俊氏を中心とする調査である。上海周辺の民間信仰や道士などの生活実態を克明に聞き取りしており、大変有意義で参考になる報告資料である。

第二には、日中社会学会日本人スタッフによる青浦県調査報告で、大阪大学の調査より一、二年遅れて、上海市青浦県で実施された。とくに民間道士や巫師などの実情にふれた

部分が、本報告の欠落している民間道士の実態をカバーしている。

第三に挙げられるのは、平成16年～18年度科学研究費補助による「清末民国期、江南デルタ市鎮社会の構造的変動と地方文献に関する基礎的研究」(研究代表者:太田出氏)である。太田出・佐藤仁史氏らによる、太湖流域社会の農漁村社会についての調査研究は、その優れた研究成果の一端である。

第四は、文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」現地調査部門に属する「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査団」(代表:二階堂善弘氏)による体系的現地調査である。この総合プロジェクト企画は、日中両国の各分野別専門家と学術研究者を網羅<sup>もうら</sup>しており、平成17年から21年まで5年間におよぶ壮大なものである。

## IV 宗教政策と道教界

### 1) 中国の宗教政策と道教協会

1982年の第五期全国人民代表大会第五回会議で改正された新憲法第35条に〈中華人民共和国の国民は、信教の自由を有する。いかなる国家機関、社会団体または個人も、国民に宗教の信仰または宗教の不信を強制してはならず、宗教を信仰する国民と宗教を信仰しない国民を差別してはならない。国家は、正常な宗教活動を保護する。いかなる人も、宗教を利用して社会秩序を破壊し、国民の身体・健康を損ない、国家の教育制度を妨害するなどの活動を行うことはできない。宗教団体と宗教事務は、外国の勢力による支配を受けない〉とある(関口泰由「中国共産党政権下における宗教」)。また同時期、中国共産党の宗教政策も発表されている。それによれば、文革期の「左の誤り」を自己批判し、具体的な政策として、①各宗教が宗教活動を行う場所を保証し、誰もそこで無神論などを宣伝してはならない、②過去に無実の罪を受けた宗教指導者の名誉回復を急ぎ、宗教界の知名人や知識分子を優遇する、などが示唆された(『紅旗』1982年第12期「社会主義段階の宗教問題に関する党の基本政策」)。

道教界に関していえば、李養正主編『当代道教』に、中国道教協会の文化大革命期以降の歴史的経緯を、次のように述べている。〈中国道教協会は、1967年圧迫されて活動を停止した。弁事機関も「文革」中に解散させられた。1979年9月初め、国務院宗教事務局は中国道教協会の元活動家を復務させ、協会機構を回復し、新たに活動を開始させた。十年の幅広い活動を経て、道教協会第三回理事会の会長及び副会長の多くは既に世を去り、常務理事、理事のうち健在の者は少なかった。各級政府宗教事務局の大いなる協力によって、遂に1980年5月7日から13日まで、北京において中国道教協会第三次全国代表会議が招集された)。この会議では「中国道教協会章程」を改正している。その改正主旨は、〈全国の道教徒と団結し、道教の優れた伝統を受け継ぎ発展させる。人民政府の指導の下、積極

的に社会主義建設に参加する。政府が宗教信仰の自由政策を貫徹するのを支援する。道教研究活動を推進し進展させる。覇権主義に反対し世界平和を維持する)の諸点であった。

これを見れば、道教協会が全国の宗教事務を主管する国務院の機能機関である国家宗教事務局の指導のもとにあることが明白である。また、道教協会常務理事の王偉業が道教協会の今後の活動任務として以下の6点をあげている。①道教徒を団結動員して我国80年代の三大任務を実現させるために貢献する。②政府が宗教信仰の自由政策を貫徹するのを継続して支援し、安定団結の政治局面を維持発展させることに協力する。③道教研究活動を進展させ、『道協会刊』を滞りなく刊行する。④道教の名山宮觀と歴史文物を保護する。⑤対外友好交流を盛んにし、我国の道教界及び研究者間との国際的友誼を深める。⑥道教の人材を育成し、道教の継続発展を担えるようにする。

第一点に挙げられている「80年代の三大任務」とは、1980年1月に鄧小平が幹部会議で提起したもので、1. ソ連の覇権主義に反対、2. 台湾統一、3. 経済建設を指し、その核心は3点目にあるといわれる。その後2001年元旦には、鄧小平の後任江沢民が新年茶話会の席上、1. 現代化建設を推進し、2. 祖国統一を完成させる、3. 世界平和を守り共同发展(発展途上国と先進国の発展)を促進する、を「三大任務」として挙げている。

また会議期間中、中共中央統一戦線工作部の張執一副部長と国務院宗教事務局肖賢法局長が、それぞれに「当面の情勢任務と統一戦線政策に関する」講話と「宗教政策に関する」講話を行った。この中で、中国共産党と人民政府の宗教信仰自由政策をさらに道教界の具体的状況に適合させることが強調され、代表者達の関心ある問題点に解答を与えて、一定程度胸中の疑念を解除し、道教界を鼓舞しその前途に確信を抱かせたという。まさに(この代表会議は、道教の歴史上一つの重要な会議である。道教の被った災難から脱却し、正常な発展の道筋を獲得した会議)であった。

「文化大革命」の受難の時期を終えて、「改革開放」の下では「宗教信仰の自由」が強調されるようになってきている。なお、道教協会に対する指導は、中共中央統一戦線工作部と国務院宗教事務局の代表が、協会の大会に出席し講話をしていることから考えて、両者の管轄に属していることがわかる。また、道教協会の姿勢は、あくまで人民政府の指導の下にあって、政府の宗教政策を支援することに終始しているように思える。

中国では、1982年に政府から全国重点宮觀21箇所が特別指定された。その狙いは多分に観光資源の色合いが強いように思われる。その重点宮觀には、<sup>たいざん</sup>泰山、<sup>ぶとうざん</sup>武当山等に並んで杭州葛嶺も挙げられている(奈良行博「道觀・祠廟と神々」)。

## 2) 杭州市道教協会の実態

協会の仕事としてあげられた「政府の宗教政策を信者に伝えること」というのは、まさに「政府と信者の橋渡し」が、道教協会の重要な任務ということになる。

既述した聞き取りの応答に見るように、杭州市道教協会の場合、厳格な組織を持たず、

ルーズな印象が強い。また、協会会員も意外と少数で、会員構成が不明確のきらいがある。財政基盤を調べてみると、政府助成金は無く、多分に寄付金に頼ること等、経済基盤の脆弱さが目立っている。しかしながら、協会傘下の玉皇山福星観が、来秋に修復再建が完了となる予定である。こうした多額な再建資金の調達経路がどうなっているのか、大いに関心が寄せられるところである。

道観における規律は、「道規」と称するが、北京白雲観の場合、以前あった杖革や跪香などは体罰だということから廃止され、もっぱら教育するだけとなったという。換言すれば、単に口頭で注意するだけになった。そのために、42年当時に比べると、道士の挙措進退などがややきびしさに欠けているといわれる（崔徳忠）。杭州においても、多分にそうした傾向がみられるように思える。

## V 道士の生活実態

### 1) 道士になった契機

道教協会会長高信一道士の場合、祖父が道士であったことから考えて、世襲道士と考えられる。当時は世襲が一般的であって、子供の時に道観に入山し、修行を重ねて道士の位階を登って行くものとされた。しかし、34歳の男性道士の場合はそうした経路をとらず、個人的理由から道教に関心を持ち、自らの意思で出家道士となっている。その直接のきっかけは、パソコン会社の経営に疲れ体調を崩したことによる。現代化が急激に進む上海経済の真ただ中、青年企業家の心身を蝕むストレスが、道教・道士への道を辿らせたというわけである。

急速な経済発展の中、心を病む人たちが増えている現実が背景にある。ちなみに、中国全土における「うつ病」患者は、推定2600万人（「人民網日本語版」2007.4.16）、あるいは3千万人（朝日新聞2008.1.10）ともいわれている。

さらに42歳の女性道士の事例では、浙江省下の農村地区から若い女性三人が語らって、杭州抱朴道院に入山している。日本でいえば、いわゆる「駆け込み寺」の類である。直接の動機は詳しくは語られなかったが、女性が道観を訪れる理由の多くは、「家庭内の揉め事や失恋など」ということから推測されるように、明らかに女性をとりまく社会矛盾を反映していると思われる。湖北省武当山が最初に女性を出家道士として受け入れられるようになったことこそ、現代中国の道教をめぐる社会環境の一大変換と考えられよう。

### 2) 道士の規律

聞き取りからうかがえるのは、道士の生活規制が大幅に緩和しつつあることである。端的な例が、34歳男性道士の家庭生活にかんする事情である。23歳で結婚し26歳の時出家したと応答しているが、全真教龍門派本来の規定では妻帯が認められていない。本人の応

答では、自分以外にも少数ながら結婚している者がいると答えている。

出家道士の日常については、女性道士の応答によると、朝五時に起床して「早課」という経を唱える勤行から始まり、昼は事務の仕事をこなし、音楽を学ぶなど様々な道教の修行を行うことになっている。参考のため、1986年当時、窪徳忠氏の観察した北京白雲觀道士の一日を挙げてみる。

①起床は、夏午前五時、冬午前六時である。起床後、約一時間拳法を行う。②七時になると、ほとんどの道士が参加して、七真殿で朝の勤行を行う。読誦する經典は『太上全真早壇功課經』である。③朝食は七時半である。齋堂前に集合し着席後、供養呪を唱えて食事をし、終わると結齋呪を誦して退場する。食後は、若干の休みの時間がある。④八時半からは、掃除その他自分のやるべき仕事をやる。⑤十二時に昼食をとるが、米の粥と白菜、豆腐、胡瓜などの菜である。⑥昼食後午後四時半までは、午前中同様自分たちの仕事をやる。⑦四時半から一時間、七真殿で晩の勤行を行う。そのときは『太上全真晩壇功課經』を読誦する。⑧晩の勤行が終わると夕食となるが、その内容は昼食と大同小異である。⑨夕食後は、打坐や読経その他、自分のやりたいことをやってよい自由時間である。⑩就寝は、午後九時半である。その他に、週二回は一同で新しい經典の勉強をしている(窪徳忠)。

杭州の場合、一旦出家した道士でも、容易に翻意して世俗に帰ることが多いようである。高道士の応答にある「ここ十数年で、少なくとも百数十人は入ったが、ほとんど出ていった」が、如実に、現代道教規律の質的緩和を示していると思われる。

ちなみに、上海市嘉定県の正一派道教についての事例を挙げておく。嘉定は旧時、道教が盛んで、明末には300所の道觀があった。解放初期にも16～7所残っていた。52～3年には、6所あった。道士は世襲で、有力になると上海の張天師から資格をもらう。彼等は「打醮<sup>だしょう</sup>」を行なった一落雷など災異、病気、夜泣き、蛇が出た、あるいは大きな物体(石・甕など)を移す家が消災降福のため道士を招く。

また死者が出た家では、道士を招き「做七<sup>さく</sup>」という「道場」を行なう。死後49日間、7日ごとに、頭七……断七までである。誕生から死後まで、道士が法事をするのは、臨時の「打醮」以外に30～40回ほどはあろう。道場を行なうのは貧富を問わない。ただ財力で規模が異なり、富戸は30～40人の道士を呼ぶことも有る。正一派の老道士の談話によれば、江西龍虎山では、上から順に、高功・都講・鑿齋の三ランクがあったが、在家道士に位階はないという。解放前、嘉定県には位階を保有する道士が多かった(濱島敦俊『華中・南デルタ農村実地調査報告書』)。

### 3) 道士の社会的地位

聞き取りによれば、道士であることに対して世間体は良くないらしい。男性道士の家族についての聞き取りで家族について質問すると、立会人の孔令宏氏から「研究に係わりがなければ聞かないで下さい」とクレームを受けた。現在道觀に入ることを希望する者は少

なくなっている。その理由の一つに「基本的に聞こえがよくない」ことをあげている。応答した高会長は、道士の地位について結局「人がどう見るかの問題である」といっている。

戦前の満鉄調査部による『中国農村慣行調査』では、華北における道士や風水先生をはじめとする村の宗教者の活動を紹介している。そのうち、山東省歴城県冷水溝荘の事例では、道士が村人祈願の中心的儀式を演じながら、その社会的地位が低いというアンバランスが存在した。彼らは「短工」に出なければ生活できないほど、貧しい階層であったのである。こうした事象は、1986年から90年にかけて実施された華北の社会構造に関する総合的調査の資料にも共通するという（佐々木衛『中国民衆の社会と秩序』）。

道士の社会的地位に関して、比較の対象として台湾在住劉枝萬氏の研究から引用することにする。氏によれば、道士には常に陰湿な一面がつきまとい、暗いイメージを人びとに与えているとされる。また中国の歴史を通じて、身分階級制度そのものは実現しなかったが、職業の貴賤に基づく差別は厳存したという。そして四民すなわち士農工商の四階級からはみ出た主な職業十八種を、上九流と下九流の二階級に分類し、台湾では道士が和尚・地理師・ト卦師・算命師などと共に上九流に入れられている。上九流は四民と同等か、もしくはそれ以上の待遇を受ける者であるが、実情は正反対で蔑称にほかならないという（劉枝萬「台湾の道教」）。

さらに、アメリカ人による広東道士の社会学的研究から、その社会的地位を規定する職能について検証してみる。それによると、広東では「死の穢れ」にさらされる相対的な程度に応じてランクづけされた専門職の階層が存在する。この階層は、儀礼的な仕事を遂行するのに必要な技術・修練・教養の水準を反映しており、例えば風水師は、その仕事が高度な技量と教養を要するので、最高位に位置づけられる。注目の道士は、何年もの修業期間を必要とするので、次に位置づけられる。道士の下に位置づけられているのは、さほどの技術や修練を必要としない多くの専門職、すなわち喇叭手<sup>らっぱしゅ</sup>、楽士、尼僧および全般にわたる下働き達である。そして、最下層には死体処理人がランクされる。死体処理人は他の全ての儀礼専門職とも区別されて、通常の人間の枠外に位置づけられている（ジェイムズ・L・ワトソン「広東社会の葬儀専門職—穢れ、儀式の実施、社会的階層」）。

死の穢れの由来は、広東の事例では、死体が発する「邪気」のため、遺体にふれると男性は陽気を奪われることによる。そのため、葬儀を取り扱う者は必然的に賤民視されるのである。ただし、女性は本来陰気のため、遺体に触れてもなんら支障がないわけである。女性道士を考える場合、下層に位置する尼僧とは別個に、従来の「穢れ」観とは異なった視角から再考すべきであろう。

#### 4) 民間道士の生活実態

高道士の言によれば「杭州市所轄の県を含め数千人いる」とされる民間道士について、今後の調査研究が待たれるが、ここでは、日中社会学会員による青浦県のフィールド調査

報告を紹介する。青浦県下蟠龍村の元道士の応答から、以下数項目に分けて引用してみた。

①家族関係：祖々父は蟠龍鎮の人で、祖々母は上海県の人。祖父は徐筐の隣村の人で、農民。父は男3人、女3人で次男だった。流動して床屋をしながら、小作していた。近くに田があった。私が8歳の時に死んだ。姉が一人上海で生きている。

②道士になるまで：私の小さい頃、蟠龍鎮はとても賑やかだった。小学校に5年行った。その頃は、遠い所では、上海の姉の所まで遊びに行ったこともある。13歳で学校を卒業して、ここから1.5km程離れた金蓮村の普江廟にいて道士の勉強をした。隣人に廟の人と仲がよい人がいて、近所の子供は、よく廟に連れて行かれて、道士になることを勧められたが、たいていの子供は嫌がってすぐ逃げ帰っていた。私の家は貧しく、租税を取られることも厳しかったので、逃げ出さずに我慢した。

③廟での生活：私が廟に行ったとき、そこには道士、そこに婿入りした道士、小道士(学生のこと。年を取ると「大道士」と呼ばれる)が私を入れて二人いた。廟での生活は、夜明けと共に起きて、まず1時間位経を読む。その後、庭掃除をして家事をした。朝ご飯を食べて、後は暇があれば経を読む。食べるものは一般の人と同じ。修行中は家に帰ることは自由だし、農作業を手伝いにも帰った。私は3年半そこで道教の経書を読んだ。最初は『早課』、次に『度亡真経』、そして『大梵宝懺』を読んだ。

④道士の仕事：人が呼びにきたら経を読みに行った。ある時は4人である時は2人で、ある時は1人で行った。病気の時は4人一緒に行った。葬式の時は2人で行った。一人の道士は○庵、金蓮、蟠龍等を中心に500戸を受持ち、三、四代前から死んだ人も含めて名前だけを書いた「経疏」というものを全戸に配ってお金を貰っていた。配るのは年四回、清明節、旧暦の7月15日、10月、春節である。貰った人は、それと「錫箔」(紙銭)と一緒に焼いた。そのために「経疏」は普段から書いておく。

⑤道士間の争い：3年半経って、道士の娘の婿の道士が私を殴った。その婿入り道士は私より7歳位年上で、村から来た人だった。私は鎮の出身で鎮の人との関係が強いので、その道士は私に客をたくさんとられると思って、私をつぶそうとしていじめたのだ。

⑥修行と分家：3年半の修行の後、私は趙巷の道士の家へ行って、1カ月修行をした。それから華漕の道士の所で1年半、上海県の道士の家で1年間修行をした。修行は主に、経書を読むことと儀式の手助けをした。合計で6年経ち、「満師」になり、独立して道士になる披露宴があった。この時は結婚を決める時でもあり、一緒に祝われた。私が21歳の時だった。披露宴は自分の家に他の道士も読んでやった。これで「分家」した。道士には「出家」と「在家」があり、「出家」の場合は結婚できないが、「在家」の場合は結婚できる。それ以外に違いはない。

⑦道服と道具：道士の服は持っていなかった。帽子だけ持っていた。儀式の時は、金持ちの道士の所へ行って、道士の服や鐘などの道具一式をお金を払って借りた。だから、儀式をするときは道具を持っている道士と一緒にした。道士の道具は蘇州の「繡花店」

という店で売っている。この店では京劇の道具や仏教の道具も売っている。道士の道具は高い。

ここに事例として登場した江南の民間道士像は、現在はすでに大きく変容していると推測される。その実態解明については、今後の早急な調査研究を待ちたい。

## VI 杭州日中戦争秘話

杭州で行なった道士の聞き取りの中から、日中戦争時期の特記すべき逸話を一つ紹介したい。応答者は、高信一氏、73歳。杭州抱朴道院住持・浙江省道教協会代表長の肩書を有する杭州市道教協会の重鎮である。上述の如く、聞き取りの冒頭に抗日時期より文化革命まで一気にご本人の苦労話が続いた。その概略は以下のような内容であった。

- 杭州が日本軍に占領され、多くの女性たちが日本軍に暴行された。若いきれいな女性は、顔に泥を塗って被害を避けた。

- 日本軍から逃れて、七千人の市民は福星観に逃げ込んだ。道観の住持が、日本の憲兵隊司令部へ行き乱暴なことをしないよう訴えたので、4人の憲兵が日本軍を説得して止めさせた。憲兵隊の効果は観面<sup>てきめん</sup>で、兵隊たちの避難民に対する暴行はいっぺんに収まった。しかし、この立派な住持は、文化大革命の時に日本の憲兵隊と関係があったということで、大変な迫害を受けた。

柳川平助中将率いる第十軍が、上海派遣軍を支援すべく、杭州湾の金山衛に上陸したのは、1937年11月5日である（森山康平『図説 日中戦争』）。12月17日の南京入城式典後、杭州に転進を命ぜられた第十軍は、12月24日早朝杭州城を占領した（西岡香織『報道戦線から見た「日中戦争」』）。中国側の抗日戦争史によれば、杭州が日本軍に陥落した37年12月24日以降、45年8月15日の日本敗戦まで、8年の長きに亘って人民の苦難が続いた（連曉鳴主編『不能忘却的歴史—抗日戦争在浙江』）。

しかし、これらの抗日戦争研究には、杭州における日本軍の残虐非道ぶりは喧伝されても、道士からの聞き取りにあるような日本憲兵隊の治安維持活動についてふれたものは皆無である。かといって日本側の記録が十全であるわけではない。全国憲友会連合会の編纂になる『日本憲兵外史』の類には、南京攻略戦に関わって憲兵隊の取締り概要が簡単に述べられているにすぎない。例えば〈中国軍が総崩れとなるや、追撃を開始した上海派遣軍と第十軍隷下各部隊の犯罪が続出した。全軍の兵力からみれば、犯罪数は少ないといえるかも知れないが、犯罪は犯罪であり、これは軍法、軍規違反である。その内容は逃亡、離脱、上官暴行、殺人、略奪、放火、婦女暴行、傷害などである〉の如き。

第十軍は、杭州湾上陸作戦後の11月8日に軍司令官名によって、中国民衆に対する「安民佈告」を発している。またその直後に配属憲兵長上砂<sup>かみさごしょうしち</sup>勝七中佐が、小川法務官を金山衛の宿舎に訪問して、上陸地点周辺の軍紀弛緩を報告し、取締りと軍法会議、囚禁場設置の

件で打合せ協議を行なった（『日本憲兵外史』）。さらに、杭州攻略戦に際して12月20日付、第十軍参謀長は麾下諸部隊に通牒を發し、南京攻略戦での不祥事を戒めた（陸支密受第六〇四一号 丁集参一第一四五号）。その文面に〈掠奪、婦女暴行、放火等ノ嚴禁ニ関シテハ縷次訓示セラレタル所ナルモ本次南京攻略ノ実績ニ徴スルニ婦女暴行ノミニテモ百余件ニ上ル忌ムヘキ事態ヲ發生セルヲ以テ重複ヲモ顧ミス注意スル所アラントス〉とあるように、特に婦女暴行が多発していたと思われる（藤原彰『天皇の軍隊と日中戦争』）。

作戦継続中の憲兵業務について、具体的な事例を供しているのは、作戦当時第十軍随伴憲兵長だった上砂勝七中佐である。氏の忌憚ない見解によれば〈戦域が逐次拡大し、作戦兵力の増大に伴って、その要員の多数が教育不十分な新募又は召集の將兵を以って充たされるようになると、思いがけぬ非行が益々無雑作に行われるようになる。これには、指揮統率者の責任は固よりのことだが、わが国民の一般的教養の如何に低いかを痛感させられた。皇軍々と叫ばれていたが、これでは皇軍が聞いてあきれる状態であったので、憲兵は一地を占領する都度、その都市村落の入口や要所に露骨な字句や、敵に逆用される虞れある字句を避けて、婉曲に日本兵に告ぐと題し、火災予防、盜難排除、住民愛護の三項を大きく書いて掲示した〉（『憲兵三十一年』）。しかし、〈軍の前進に伴い、いろいろの事件も増えて来るので、この取締りには容易ならぬ苦心をしたが、何分数個師団二十万の大軍に配置された憲兵の数僅かに百名足らずでは、如何とも方法がない〉有様であった。ただし、先の杭州占領に際して出された通牒の秩序維持に留意すべき5項目中3番目に、〈第十八、第一百師団ヨリ歩兵各一中隊ヲ速ニ日本領事館附近ニ出シ集團憲兵隊長上砂中佐ノ指揮ニ入りテ補助憲兵タラシムルヲ以テ之ト密ニ連絡スルコト〉とあって、憲兵隊増強の進言は受け入れられたようである。

さて高道士が言う、杭州市民が逃げ込んだとされる玉皇山福星觀は、西湖三大道院の一つに数えられた由緒ある道教施設である。案内板によれば、〈標高237メートル、山頂に達すると「玉皇山」と額のかかった南大門と「祥雲護仙」の壁画が迎える。主要な建築になる福星觀は唐代に建てられ、もと仏教寺院だったが、後に道教寺院に建て替えられ、現在は料理店になっている。道觀の周辺には宋代の遺跡「白玉蟾井」と清代の「天一池」がある。新たに「望湖楼」「登雲閣」等の建物が建てられた。遠く左に西湖、右に錢塘江、眼下に杭州城を望むことができる〉と記されている。なお文化大革命の際、道觀は破壊の憂き目を見たが、2008年秋には念願の福星觀再建が果たされ、めでたく落成式典を挙げる予定とのことである。

この「道觀住持の義挙」ともいべき逸話の真偽について、一つの文献資料が残されている。李養正主編『当代道教』の第十章「道教史に名を留める現代道教の著名人」に掲載されている、当時の福星觀監院（住持に同じ）、李理山（1873年、江蘇省鎮江生まれ）についての記述である。彼は〈日本軍の殺人放火・姦淫略奪により、錢塘江沿岸の南星橋一帯が焼尽され廢墟となり、民衆が衣食に欠いて、死線を彷徨い逃げ惑っているのを目にして、大

いに義憤に駆られ、……民族的自尊心と愛国感情から抗日救民運動に参加して、1700 余名の避難民を紫来洞道院に収容した。そして、国際赤十字社に支援を仰いだ」とある。また弟子の呂宗安は、師の指示に従って〈上海租界武定路に福星観上海分院を創建し、救済募金を杭州の難民に供した〉という。しかし、李理山住持は 1951 年 4 月に逮捕され、反革命罪で十年の徒刑判決をうけ獄中で病没する。呂宗安ら弟子たちの尽力によって、故李理山師が名誉回復するのは、実に 1986 年 12 月のことであった。

聞き取りと文献資料との齟齬は、難民の人数と収容場所に関するくい違いである。聞き取りの「7000 人」は、やや多すぎる嫌いがある。実際に玉皇山に登ってみて、1700 名のほうが妥当な感じがする。難民の収容場所となった「紫来洞道院」は、李理山氏が福星観当家に就いていた時に開鑿した洞窟「紫来洞」を指していると思われる。

道院住持と杭州憲兵隊との遣り取りが如何様なものであったか推測するしかないが、憲兵隊長は上記の上砂中佐だった可能性が高い。なぜなら『憲兵三十一年』の中にもう一つ同様な逸話があるからである。西湖の東、市街地の南に面した吳山中腹の洞窟内に、紅卍会の庇護を受けて隠れていた老人や女子供多数を発見し、上砂中佐自ら軍参謀長に至急救出するよう申し出た一件である。昭和 13 年正月のことであるが、同年 2 月に急遽青島に転任命令が出たため、後の展開は不明である。

こうした事例を通じて、戦時にあって憲兵としての気概と良識を発揮した上砂勝七のごとき帝国軍人が存在したことは、多分に日中戦争の負の側面ばかり見ることの危うさに気づくきっかけを、私に与えてくれたように思う。また「戦争放棄と平和主義」を骨格とする憲法を保持する国の主権者の一人として、まだまだ隠れて見えてこない戦争の真実を見出すことの重要性を感知しえた。

なお、戦争時に生じる残虐行為に対する分析視角として、構造的要因と状況的要因の二つのレベルが重要であるとの指摘（楊大慶「南京虐殺事件—原因論の考察」）は、日中戦争に限らず不可欠の研究視点であると思われる。

## VII 今後の課題

二十有余年ぶりに訪れた杭州の風景は、西湖周辺こそ風光明媚なたたずまいを残していたものの、市街地は一変し近代的なビル群が林立していた。杭州道教協会と道士の聞き取りを通じて、現代道教の将来展望を見出すには、余りにも短く不完全な聞き取り調査であったことを、まず反省したい。ただ、これからも紆余曲折が予測されるものの、中国固有の伝統宗教としての道教は、中国民衆の宗教的特質を国際的に際立たせるものとして、その存在意義を内外に一層喧伝されていくであろうと推察する。

さらに、最近取りざたされる、日中間の政治的「不和」を解消する為には、観光やビジネス等民間レベルの多面的交流が不可欠であると確信するに至った。今回の訪中は、その

意味でも小規模ながら「文化学術交流」の任を果たしえたと思う。中国道教と日本陰陽道、日中戦争時の占領実態、現代社会の抱える諸問題の日中比較など、湧き出ずる検討課題を前に、一層奮い立つ心境である。

杭州最後の夜、宴の席でいみじくも交わされた会話に、今後の研究課題が語りつくされていた。「圧倒的多数を占める民間道士の聞き取りが必要ですね」、「ええ、そっちの方が面白そうです」、「十人ぐらい人手があればできそうに思います」、「日本の方で経費を負担願えればいいんですが……」。悩みは尽きないものだ。

(にのみや いちろう・大阪府立桃谷高校)

## 【参考文献】

中文

『杭州葛嶺抱樸道院』抱樸道院 1992年

『葛嶺抱樸道院』抱樸道院 2003年

顧希佳・張玉観「太保書調査」『東南文化』1992年第2期

李振綱主編 孔令宏著『中国道教史話』河北大学出版社 1999年

李養正主編『当代道教』東方出版社 2000年

史孝進・劉仲宇主編『道教風俗談』上海辞書出版社 2003年

孔令宏「浙江道教史発凡」『杭州師範学院学報(社会科学版)』2003年第6期

連曉鳴主編『不能忘却の歴史—抗日戦争在浙江』浙江人民出版社 2005年

日文

『杭州観光案内』杭州市旅遊委員会 2006年

竹内実『中国長江歴史の旅』朝日選書 2003年

二階堂善弘「杭州の寺廟について」『コミュニケーション学科論集(茨城大学人文学部紀要)』第11号 2002年

宮崎市定『水滸伝—虚構の中の史実』中公新書 1972年

中村喬『中国の年中行事』平凡社選書 1988年

村上嘉実「鍊金術」『道教』第一卷 平河出版社 1983年

劉枝萬「台湾の道教」『道教』第三卷 平河出版社 1983年

佐々木衛『中国民衆の社会と秩序』東方書店 1993年

野口鐵郎編『道教事典』平河出版社 1994年

ジェイムズ・L・ワトソン「広東社会の葬儀専門職—穢れ、儀式の実施、社会的階層」J・L・ワトソン、E・S・ロウスキ編『中国の死の儀礼』平凡社 1994年

張紫晨著 伊藤清司・堀田洋子訳『中国の巫術』学生社 1995年

窪徳忠『道教の神々』講談社学術文庫 1996年(1986年 平河出版社より刊行)

同「北京白雲觀の現状について」『道教と仏教』窪徳忠著作集7 第一書房 1999年

奈良行博「地域社会と道教」『講座道教』第五卷 雄山閣出版 2001年

同「道觀・祠廟と神々」野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』大修館書店 2004年

松本浩一『中国の呪術』大修館書店 2001年

同『中国人の宗教・道教とは何か』PHP新書 2006年

- 関口泰由「中国共産党政権下における宗教—宗教政策を中心として—」日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No. 5 2004年
- 上砂勝七『憲兵三十一年』東京ライフ社 1955年
- 全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲兵正史』1976年
- 全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲兵外史』1983年
- 西岡香織『報道戦線から見た「日中戦争」—陸軍報道部長 馬淵逸雄の足跡—』芙蓉書房 1999年
- 太平洋戦争研究会編・森山康平著『図説 日中戦争』河出書房新社 2000年
- 同 『証言・南京事件と三光作戦』河出文庫 2007年
- 藤原彰『天皇の軍隊と日中戦争』大月書店 2006年
- 楊大慶「南京虐殺事件—原因論の考察」『岩波講座 アジア・太平洋戦争 5 戦場の諸相』岩波書店 2006年
- 笠原十九司『南京事件論争史 日本人は史実をどう認識してきたか』平凡社新書 2007年
- 【調査資料文献】
- 濱島敦俊・片山剛・高橋正著『華中・南デルタ農村実地調査報告書』大阪大学文学部紀要 第34巻 1994年
- 根橋、木下、中村、富田、東編著『資料 青浦県フィールドノート・宗教篇』1988年調査
- 東美晴『解放前中国江南農村におけるジェンダーの研究』甲南大学 1997年
- 太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究—地方文献と現地調査からのアプローチ』汲古書院 2007年

〈杭州道教協会・道士聞き取り写真〉



玉皇山福星観にて、前列左二番目に男性道士



杭州玉皇山福星観登雲閣



高信一抱朴道院住持・浙江省道教協会代表長



杭州抱朴道院山門



抱朴道院にて、中央が女性道士



抱朴道院の道観入口、道の字が印象的